# 嵐の中の七霊

# 嵐の中の亡霊

アドナト・レオテリ 著

もう何年もスカイリムをくまなく旅しては、その経験と冒険を記している。

旅ではいくつもの素晴らしい光景や変わった生物に遭遇したが、1つだけ記憶に残るものがある。残したくはなかったが。

私はスカイリムを縦横に移動するカジートの隊商と一緒に旅をしており、大都市の門外で商品を売り歩いていた。

ウィンドヘルムの近くで嵐に遭った。暴力的なほど酷い強風で、人生で最悪のものだった。風はオブリビオンの全デイドラのようにうねり、吹きつける雪で世界が見えなくなった。

リサードが停止を命じて、我々はよろめきながら道を外れ、槍を突き刺すように手や顔に降ってくる雪の粒を防いだ。松の雑木林を避難所にして身を寄せ合った。天幕を張るのは無理だった--出した途端風にもぎ取られる。

奴らは嵐が最も激しい時に襲ってきた。恐らく6体はいただろう。吹雪と強風で我々の視覚と聴覚は利かなかったため、断言するのは難しい。

奴らはおよそ人間大で、前かがみの醜い姿だった。衣服はぼろか革しか着ていなかった。明らかに他の者から奪ったであろう、ダガーや剣など様々な物で武装していた。

鼻なんてものはなく、長い開口部の鼻孔があるだけだった。耳は鋭く尖っていて、エルフの遠い親類だと示していた。青白い肌と生気のない黒い目を持ち、まるで悪夢から抜け出てきたようだった。

ビーシャが最初に発見したが、彼女を守るには遅すぎた。その死の叫びは大きく、うなるような風を超えて聞こえた。あの悲鳴がみんなを救ってくれた。

敵の存在に注意して、カジートは剣を抜いて円を作り外側を向いた。白い悪霊は我々を囲むには少なすぎた。3体の雪の悪魔が倒れると、残りは退却して2度と戻って来なかった。

嵐が弱まり、我々は翌朝ウィンドヘルムに着いた。私はキャンドルハース・ホールに宿泊し、街の石壁の内側にいることをとても快適だと感じた。

快適だった。少なくとも眠りにつき、夢であの恐ろしい生物が舞い戻るのを見るまでは。

# 嵐の中の亡霊

| | |
|---|---|
| **FormId** | skyrim.esm:0ED031 |
| **Owning plugin** | skyrim.esm |
| **Local FormId** | 0ED031 |
| **Editor ID** | Book3ValuableGhostsInTheStorm |
| **Inventory image** | (none) |
| **Menu art** | HighPolyBasicBook03 |
| **Value (gold)** | 13 |
| **Type** | Book or tome |
| **Weight** | 1 |
| **Can be taken** | Yes |
| **Teaches** | (none) |
| **Inventory description** | (none) |
| **Keywords** | VendorItemBook |
| **Locations** | 277 |
| **Leveled lists** | 10 |
| **Scripts** | 0 |

© Bethesda Softworks LLC and the authors of the mods in the load order.
Exported and generated with SkyrimSourceExporter.